えっ、勇者じゃない？

泉 飛白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
えっ、勇者じゃない？

【Ｎコード】
Ｎ１４３８Ｕ

【作者名】
泉　飛白

【あらすじ】
異世界の魔王　ブラッドが突然勇者として召還されて、異世界出身の仲間を増やしつつこのゲームじみた世界で魔王を探す異世界の魔王の話。※　勢いで連載のため中身は保証しません。

1

私の名はブラッド・バエル・ベリアル・ベルゼ。一応、勇者ということになっているらしい。そして何故この私が勇者等という下等な職に就いてしまったかというと、２日前まで時間を遡ることになる。

あれは大地が歓喜に震え上がり、暗雲立ち込めた空がついに黒き雨と雷で音楽と踊りをしだした実に良き日の事だった。

赤黒い道筋を歩く私は邪魔な塊を蹴飛ばしながら、周りから漂う匂いを楽しみ、粘着いた唇の舐めとり、雨で弱まることない炎を見ながら城に向かっていた私の足元に現れた魔法の陣に目を見開いた。

「…？」

瞬きをした次の瞬間には見知らぬ場所に立っていた私を取り囲む人間に顔を顰めていると一番年老いた人間が近寄ってきた。

「おお、なんと勇ましき勇者様、突然のご無礼を申し訳ありません。そしてあなた様にお願いがあるのです。魔王を倒していただきたい」

さらさらと口上を述べてあれよこれよと良いながら路銀と地図を持たせて、半ば追い出すように城から出された私は街の外へと追い出された。

街で耳にした話しに寄れば勇者召還はこれで７８４回目であり、未だに勇者は魔王を倒せず敗れて死んだとか逃げ出した等と噂していた。

ふむ。丁度暇を持て余していた頃だ。下等だが勇者というのもなかなか面白いかもしれん。
そう思った私は地図を見て真っ直ぐ魔王の治めている地に向かうことにしたのだが、不意にピロリンと音が変な音が鳴って、何もなかった空に文字が浮かび上がったそれに眉を顰めた。

ブラッド・B・B・ベルゼ　ＬＶ　不明
ＨＰ／ＭＰ：∞／∞
種族：魔族
性別：不明
職業：勇者

これはなんだ？　と首を傾げた所でそれは何事も無かったように消えてしまい私はとりあえず思った。

「魔王でも勇者に職業を変えられるのか」

それ以前に勇者は職業なのか。通りで昔あんなに勇者を名乗る人間共が殺しても殺しても虫蝼のようにわらわらと溢れ出てきたわけか。最近はいなくなってしまったのだがな。

特に害があるわけではないから放って置けば良いか。そのうちにわかるだろうと適当に思い私は魔王を目指すことにしたのだった。

魔王の治めている地に着く前に途中で小さな村を見つけたのでそこで食事をすることにした。流石に魔獣の肉に飽きた。

「すまんが、ここの名物はあるか？」
「ん、この村は芋料理がうまいと思うけど、アンタってエルフか？」

「ほぉ、エルフは美人だってぇが、ほんとじゃなぁ。どこから来たんじゃ？」

若い人間は愛想良い笑みを浮かべてそう言ったが、私がこういうことを言うのは可笑しいかもしれないが悪役面だな。にしてもエルフ。確かに私は美しく綺麗な顔をしているが、一応は魔王だぞ？

複雑だな。それにしても人間の歳寄りは醜いな。というか、エルフだろうが当たりと外れがあるぞ。アレは弓に長けた一族であって美を司る一族ではない。

「ふむ。私はエルフではなく魔族だ」
「…ま、魔族ぅう！？」
「ひぃーっ！」

腰を抜かした歳寄りはそのまま後退り、若い人間は警戒するように剣に手を付け構えようとしたが、私はとりあえず食事を取りたい。

「魔王を倒すために呼ばれ、今は魔王を探す旅に出たところだ」
「魔王って…アイツら魔族まで召喚しやがったのか！」

とりあえず、警戒を解かんと食事にはありつけそうにはないかも知れん。私は疲れはしないが腹は減るのだ。
叫んで同情の眼差しを向けてくる割には警戒を解かない。

「…同じ魔族じゃ、そのやりにくいんじゃねえか？」
「私の世界では今は魔族同士で殺し合い。いや魔王を殺そうと一部魔族は躍起になっている。さして変わらん。そんなことよりも腹が減って死んでしまいそうだ」
「なんか食わせてやる。同じ境遇だからな」

腹の虫も鳴り始め、一気に気が抜けたその若い人間は警戒を解いたが、私が人間を食べるんじゃないかとか思わないのか？
腰を抜かした歳寄りも私が害がなさそうとわかるとホッとしているようだし、周りも恐怖に包まれていたはずが和やか。

「私がいうのは変かもしれないが、この村は警戒心が足りないのではないか？」
「ははっ、言えてるな！」
「笑い事ではない。私が暴れたら滅ぶぞ？」

別の世界の魔王だからな。そんなことくらい容易いのだ。

「そんなヤツに見えないし」
「…とりあえず、芋料理がうまいならその中のオススメをくれ」
「おう」

芋か。魔界は天候や環境でそういった類の食物は育たないからな。毒草などは育つのだがな。何百年ぶりだろうかと思いながら椅子に腰を掛けて料理を待った。

腹を満たしたらまず宿屋で寝よう。私は遠征が多く城には帰っても仕事が山積みで寝る暇もなかった。こればかりはあの事を後悔してしまう。

「出来たぜ。俺はケン・タナカってんだ。アンタは？」
「ふふひは」
「いや、食い終わってからでいいや」

美味い。暖かな料理というのはやはり格別だなと思いながら私は

口に放り込み味わっていれば、いい食いっぷりとケンと名乗った人間は呆れた顔でいった。

「私はブラッド・ベルゼだ」

「ふぅん、そっちの魔族はアンタみたいなのがいっぱいいたのか？」

「私みたい？」

どういう意味だ。

「そんな綺麗な顔してるのかなぁ、とか思ってさ」

「ああ、そう言うことか。確かに大半の魔族の容姿は美しいといわれてはいるぞ」

「へぇ、それは恐ろしいな。ちょっと油断したら殺されるってわけか」

魔族が魔族の美貌に目を奪われるということは少ないが無いわけでもない。だが、命取りになるほどの阿呆は多くない。人間なら目を奪われ魔族の餌になるが。

人間でも稀に魔族の魅了を打ち消すほどの聖職者がいた。

「魔王を倒すなんて俺は放棄して店開いたが、アンタは倒しに行くのか？」

「倒す？」

「え、違うのか」

「ただこの世界の魔王はどれほどの者が見てみたいだけだ。私は別に倒そうとは思っていない」

世界征服は思ったより楽ではなかった。仕事が山のように多くなり、反乱鎮圧も半端なものではないのだ。転移魔法でパッと行くと面白味もないのだからこれからこの野望は止めようと誓った。

そしてあまり種族を殺すと下等生物が以上に増えてしまい食物バランスがまたしても崩れてしまうからこの惨殺の趣味も止めた。いい加減にまともな食事をしたい。

何かをすると面倒が起こるので私は衝動に任せての行動は自粛する事にしているのだ。

「この世界に来ても面倒なことをするなどしたくはない」
「そうか、まだ食うのか？」
「いや十分だ。酒以外の飲み物をくれ」

それを飲んだら何年ぶりのベッドで休むとしようじゃないか。

「なんだアンタ、酒飲めないのか」
「違う。私は酒を飲めないのではなく、飲まないのだ」

酒癖が悪いわけではない、酔うわけでもない。ただ嫌いだ。癖のある物は特に飲みたくはない。酒を飲んで腹が膨れるわけでもない。
なら美味しい甘いジュースなどを飲んだ方がまだましだ。こちらの酒は飲んだことはないがさして変わらんだろうからな。

2

冷たい。ひんやりと冷たいのだがどうしてなのだろうかと目を開ければ床だ。落ちたのかとぼんやりと思いながら髪を掻き毟るように撫でる。

身体を起ながら大きく欠伸をして周りを見たが見慣れない部屋。

「…ああ、そうか」

異世界に召還されて魔王がどんな奴なのか気になって探しに行こうと思っていたんだったと思い返しながら、何故ベッドがあんなに遠くに。私は確かにベッドの上で眠っていたはずなのだが…。

グゥと腹が鳴った。今日は脂っぽい物を食べようと思いながらボサボサな髪を手で梳き、空いている手で目元を擦りながら私は呪文を唱えて着替えを終わらせた。

「ふぇっくしょんっ！」

床で寝ていたからか身体が冷えているし埃っぽいからかくしゃみが出た。鼻水を啜りながらもう一度呪文を唱え身体を綺麗にした。

沸かした湯などで身体を拭くのが常識らしく、風呂などは上流貴族や王族だけだとケンが言っていた。桶と手拭いを渡されたが眠かった私は早々に寝間着を着用し寝てしまった。

相当に小汚かったらしい。髪は魔物の血で固まって赤黒かったり、土などで汚れていたし、服も同じくそうで所々は斬れていた。召還時よりも酷かった。

汚れてそれだけ美人に見えるんだから綺麗になったらもっと美人だろうな、とケンがそんなことを言っていた。

階段を降りて行けばケンの声が聞こえてきた。実は異世界仲間のよしみで止めてもらったのだ。

「文句言ってねえでとっとと食って働きにいけ！」
「ふむ。朝から賑やかだな」
「まあな。ブラッド、おはよお？」

振り向いた瞬間に固まってしまったケンに周りも何だと騒ぎ出し始めた。私は気にせずに歩みを進めて昨日食事を取った場所を改めて見回したと同時に一気に静寂した空気に頭を捻る。

「どうかしたのか？」
「…アンタ本当にブラッドか？」
「いかにも私はブラッド・ベルゼだが。それがどうかしたのか」

特に私は昨日と何ら変わらないはずなのだが、今だってちゃんと人型で人間とさほど変わらないはずだ。

「詐欺だあぁぁぁっ！」
「…？」
「見れたもんじゃないっ、つか詐欺じゃねえかよ。見た目が女神か天使なのに、これで魔族なんだぜ！？」

ふむ、強ち間違ってもいないが詐欺だと言われる筋合いはないぞ。他人の美醜の感覚でここまで驚愕されたことなど生まれてこのかた一度もない。

というより、何故目を逸らしながらも的確に私を指さすなど器用な真似が出来るのだ。

「とりあえず部屋に戻れ！」
「だが、腹が減った。今日はこってりとした物を」
「ハウスッ！」

食べたいのだ。それすら最後まで言わせてもらえず渋々と先程来たばかりの道を引き返すことにしたが、腹の虫が名残惜しげにグゥと鳴る。
部屋に戻る頃にはドッと沸き上がるように皆が口々に叫んでいるようだったが気にも止めず、ベッドを呪文を唱え綺麗にしてから腰掛けた。

「…私は詐欺師だったのか？」

ピロリンと音が鳴り空に文字が浮かんだのに私は衝撃を覚えた。

称号　詐欺師魔族　を入手しました

やはり私は詐欺師だったのか。沈む気分を笑うように消えていったような文字に殺気すら感じる。
だいたいピロリンってなんだ。私のことを小馬鹿にしよって、猪口才なっ！

「あー、ケンだけど。ちょっとドア開けないまま話して良いか？」
「…なんだ」
「やっ、そのだな。俺もそうなんだけど…アンタちょっとその顔を」

私の顔？　なんだ、また詐欺だなんだと言いにきたのかと思うと魔力が小さく漏れだして、どす黒い霧状にと姿を変え始めた。

「顔が綺麗過ぎてまともに話せそうにないからどうにかしてくれ！」
「はぁ？」
「頼む、マジでっ！」

必死な形相だがやはりこちらを見ていないがすぐに、好きなもん何でも作ってやるから、と言う言葉に負けて私は呪文を唱え始める。
私の世界では姿を偽ることは普通ではあったがまさか自分がやることになるとは思わなかった。しかも真逆な理由などで。

「これでどうだ？」
「申し分ないっス！」

それで店に行けたのだが、なぜかそれでも他の客達がよそよそしいというか、拝む人間もいるのはなぜだ？
眉間に皺が寄ると近くの人間の女に伸ばされた。

「駄目じゃない。皺ついちゃうわよ！」
「出来たぜ、俺特製のスタミナ料理だ」
「おお、素晴らしい」

特盛りに盛られた料理の数々に私は目を光らせて空腹の腹を満たすために食べ始める頃にはパラパラと店から名残惜しそうに客が出て行く。
その気持ちは私には良くわかるぞ。ケンの作る料理は絶品ばかりだ！

「俺は日本からこっちの世界に来た。ブラッドは何処から来たんだ？」
「ふぐぅふう」
「食ってからでいいから」

ゆっくりと咀嚼しながら考えていたのだが、ニホンとはどこだ？
まあ、同じ世界からきたという訳ではないだろうから違う異世界かもしれんな。

「私は魔界。自分の城の帰り道に突然足元に魔法の陣があら」
「ちょっ、アンタ地球出身じゃないのか！？」
「チキュー？」

私はそんなに驚かせるようなことを言ったのかと考えるが特に変わった発言はしていない。ケンはなぜそんな当たり前みたいにいうのだ？
今までに召還された者は皆全てチキューが出身だったということなのだろうか。

「本当に魔族！」
「ほうはぁほう」
「だから、食いながら喋んなあ！」

緊迫感とかシリアスかげんが出ないだろお、などと訳の分からないことを叫びだしたケンは放って最後の一欠片を口に入れた。

「私は魔族だぞ。さすがに魔族は人にはなれない。逆は稀にあると聞くが」
「マジかよ。じゃなくて、だったらこのゲームみたいな設定も知らないのか」

良く話が分からんな。甘ったるいジュースを飲みながら私は自分のいなくなった世界を思ったが、あそこに私がいなくなって困ることなどない。むしろ、喜んでいるかもしれんな。

「ブラッド、アンタって自分のステータス見れるか？」
「ステータス…なんだそれは」

どうやら勝手が違うらしく苦戦したが口に出すとあの最初の時のように空に文字が出たが、多少違う気がした。
良くわからないと言うとケンはパーティーを組んだ方がわかりやすいかもなと組んだのだ。

「これがレベル、って不明？」
「そうだな。ケンはレベル５３と出ているのになぜ」
「…なんでヒットポイントとマジックポイントが無限。いやこれは８分の８かもなあ…ってんなわけあるかあ！」

なぜ怒鳴るのだ。というか、ヒットポイントとマジックポイントとはなんだ？

「称号…え、魔王？」
「私の世界では魔王として世界を統べっていたのだ」

その後もケンの驚愕は生半可のモノではなかった。心なしか距離が離れていた気がする。そしてまた再び詐欺扱いされてしまったのは言うまでもなかった。
とりあえず称号全てケンに言った後に一番妥当な【詐欺師魔族】となったのが納得行かないが、ケンは【悪役面の料理人】だったから文句は言わなかった。

3

私は注意されたことがある。１つ、魔王だったことを喋らない。２つ、喚ばれたからには勇者として過ごすこと。３つ、絶対に元の姿で歩かないことの３つだ。

ケンも勇者として喚ばれたのではないかと不意に思ったが何を言われるかわからないので黙った。

「とりあえず、この世界の常識を学べ」

目の前にドサッと置かれた本に唖然としたが、食事は運んでやるというケンの言葉に私は真面目に取り組むことにした。

美味い食事が出来るなら喜んで勉学をしよう。

「…変な世界だな」

人間と魔族が崇める者が一緒などとは、世も末だな。私がいた世界では当然のようにいた忌まわしき者。

長年の戦いにおいても決着のつかぬ間に私は此処にいる。まあ、今はほとんどの接触はないに等しかったのだがな。

どのみち、私達からは何もできない。

「天使」

いるかいないかなど私には関係ないが、あまり良い感じがしないのは何故だろうか。悪寒のようなものが走る。

宗教は虫ずも走るので後にしよう。

歴史上、今のように頻繁には勇者召喚は昔はあまりされてはいなかった。過去に9回しかされてない。しかも、召喚理由は魔王退治でないことが多い。
術者の失敗、生け贄、技術提供、花嫁、魔王退治、好奇心といった類で召喚。有名なのが魔王退治というだけだ。

今のあそこの王は悪戯に召喚を命じているような者だ。昔の魔王退治にはそれなりの理由もあるようだし、やはり争いごとに首を突っ込みたくはない。
ややこしくなるに決まっている。

「飯だぞ、ブラッド」
「おぉっ！」

器用にドアを開けたらしいケンは両手に料理を持っていた。ふむ、どうやって開けたのだろう。
ケンは魔法が使えないと言っていたはずなのだが。正確には才能がないだった。

「昼過ぎで悪いけどな。で、この世界について少しはわかったか」
「ふほぉひはふぉへはひは」
「アンタ、もう食ってんのか！」

口いっぱいに頬張ってしまったのはしかたないだろう。
咀嚼をしながらも次の獲物をゆっくりと吟味し狙い定めるが、あまり早く終わらせることもない。

「可笑しな世界だ。この世界の神は天使だとでも言っているような感じだ」
「そうだな。魔族も天使崇めてる」

「気に入らん」

私の世界よりもこの世界は平穏だ。殺伐ともしていないし、争いもないのだと窺える。

魔族と人間が争いを起こしているわけではない。ただ決められた領域でそれぞれが生活しているだけだ。

「この魔王退治は人間が自分の治める土地を増やすためのものだろうな」

「は？」

「私ならすぐにこの魔王領に近い此処を廃村にしている」

あれだけ召喚して魔族側を刺激しているのだから何かあっても可笑しくはない。

「特に魔族との間は悪くないのだろう。交流がないから魔族を怖がるのだ」

「ってことは、魔族に非はない？」

「ほうはもひへふほ」

「食うな！」

意味わからんといいたげなケンは頭を乱暴に掻き毟る。私は咀嚼をしながら味まうが、不意に思い出した。

「そうだとして、退治をしにいった勇者は魔王と殺りあったのだろうか、それとも夢半ばで討たれたのだろうか？」

「どっちでもいいわ、そんなの」

「いや、大事だ。一方的に魔族を殺し回っている勇者もいるかもしれんぞ？」

憶測にしろ被害は魔族が受けているに違いない有り様だろう。この世界の魔族は弱者なのではないのかと疑いたい。
それか召喚された持て成しでは期待できずに街や村に居ついたのが多かったか。召喚された者が魔物に初っ端から倒れたかだ。

なんというか、非道さがこの世界に足りないのではないか？
まあ、私が教えてやっても良いのだが、一切責任は取らんぞ。

4

「ワタシと付き合ってっ！」
「何処にだ？」

あまり遠くとか教会とかでなければ私は別にかまわないのだが、一体彼女は何をそんなに切羽詰まっているんだと首を傾げたのを見てケンは深い溜め息を吐き出し頭を抱えた。
言葉と共に両の手を握られてしまいせっかくの料理をお預けされているままなので早く会話を済ませたい。

「このまま2人でハネムーンッ！」
「…ハネムーン？」

ハネムーンとは何だと頭を傾げているとケンは女の頭を分厚い本で叩いた。とても良い音がしたな。

「やめろ、ド変態」
「ッ～、たいわよおぉケン！」
「とりあえず離してやれ」

渋々と手を離してぶつくさと文句を言いながら叩かれた頭を撫でる様子を呆然と眺めていたがすぐに食事が冷めてしまうと思い食事をすることにした。
今日の料理も相変わらず素晴らしいな。もう魔王とかどうでもいい。ここに住み着きたい。

楽しみのデザートは今旬の果物だろうと予測しながら最後にじっくりと味わうとしようと決める。

「ワタシ、エミー・ホージョーです。可愛くエミーって呼んでね！」
「……」
「お、珍しく喋んなかったな。やっと口にもの入れながら喋んの直ったのか」

ふむ、どちらかというと言葉にすら出来なかっただけなのだが。可愛くと言われても正直私にはわからない。
苦手な女だ。

「えぇ～、自己紹介したのにしてくれないのぉ？」
「ふらっふ、ふぇんふ」
「直ってねえし。喋るなっていっつも言ってんだろ」

はっ、そうだった。
怒られて食事を抜かれたらつい暴れてしまいそうだ。そんなことになったらもう二度と食べられなくなってしまう。気を付けねばならん。

「いやぁん、眉間にしわ寄せちゃだめぇ」

眉間にしわを寄せることも悪いことなのかと頭を傾げそうになったがケンの眉間には深々としわが寄せられていた。

「エミー、そろそろ静かにしねえとその口縫い合わせんぞ？」
「静かにします」

ピタリと静かになった。ケンは凄い男だな、一瞬だった。
その雰囲気が多少見に覚えがあるような気がして微かに身震いをしそうになったのだが、あまりよく思い出せない。というよりも思

い出したくない。

気を取り直し最後にデザートを口にする。その味に私は自然とほくそ笑みながら味わった。

どうやら私の予想はあったったようだ。果物をそのまま食べるよりも上手い。ケンはとてもいい仕事をする。

弟子入りをしたら私もケンのように素晴らしい料理を作れるまでになるのだろうかと考えているとエミーが話しかけてきた。

「フラッフは魔王退治に行くの？」

「うむ。魔王という人物を見に行こうと思っている」

「いや、真面目に答えんのはいいが。その前にフラッフじゃねえだろ、ブラッドだろお前」

特に気にするようなことではないと思うのだが大切なことなのか。

「私はブラッド・ベルゼという。よろしく頼む、エミー？」

可愛くとはどう言えばいいかわからず疑問で返すとエミーがプルプルと震えだしたので首を傾げる。

もしや、怒らせるようなことをしてしまったのだろうかと考えるが考えてもわからない。

「きゃわいぃっ！」

「…っ！」

タックルされたせいで椅子ごと床に叩きつけられた。痛いとは思わなかったが背筋にゾワリと何かが走った。冷や汗が流れ動悸が止まらない

フッと浮かんできた顔を思い出し、だからあの雰囲気に覚えがあったのだと顔を青ざめさせる。

「って、顔真っ青じゃない。まさか食中毒！？」

「作った本人の前で変な疑いかけんな、家はそんなもんださねえし絶対。つか、本当に真っ青だなブラッド」

エミーは申し訳無さそうに離れて心配そうに私を見ていた。

とりあえずこちらの魔王を探そう。形だけでもそうするべきだと本能が告げる。こんな所で一人幸せに浸っていただけなんてしれたら目も当てられない。

「だ、だだ大丈夫だ、問題ない」

「いや、問題ありだろ」

私には恐れるものなど無いはずだ。魔界で魔王をしていた時もそんなに恐ろしいモノは無かったとは言わないが少なかったのだ。

「明日、私は魔王探しの旅に出る」

バレたら怖い。

武力行使もせずにいるであろう魔王に会おう。良き領地の納め方を学びこちらに来ても真面目にやっていたと主張しなければならん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1438u/

えっ、勇者じゃない？

2011年10月7日12時51分発行